

現代俳句

# にいがた

第14号



新潟県現代俳句協会

令和4年8月1日発行



油断を許さないコロナ禍生活。協会としては春、秋の「いちいち吟行会」や「通信句会」で心を繋ぎつつ、高齢化、会員減少などの現状に即した活動や交流を考えてゆくことが求められている。個人的には俳壇や各種のコンクールに積極的に挑戦もできよう。

俳句はこのような世情の時も頼もしい心の支えとなり、同伴者となって困難の道を切り開いてくれる。長い自粛生活の続く中で改めて実感したことである。

当協会の最大行事である「にいがた俳句フェスティバル」が無事終了した。コロナ禍で今年も開催が危ぶまれていたが、「蔓延防止等重点措置」が解除されたため、感染対策に配慮しつつようやく実現できた大会である。

清水道徑会長は、ご挨拶の中で「今回は第三十回目。節目らしい特別のことを企画したかったが、コロナ禍に悩まされて出来なかった。」と無念さを述べられた。そして、平成四年の第一回の盛況ぶりや、その後の印象に強く残る回、当時の講師のお話などを混えて、懐しく三十年間を回顧された。

感染の波が幾度もぶり返し、自粛生活を強いられた二年間であるが、事務局長の熱意で継続される通信句会は第十六回目になった。初回と同じく会員の半数以上の参加があり、期待されていることがわかる。

ところで、今大会の講師としてお迎えした石 寒太氏の演題は「コロナ禍の俳句生活」であった。氏は「心語一如」をモットーに「炎環」を創刊。主宰として、また数々の著書の執筆、カルチャー教室でのご指導等々、俳壇で活躍されている。ご自身の生活の急激な変化や、自粛生活の受け止め方、この期間の有効な生かし方などについて熱く語られた。

こうして第三十回という節目の「俳句フェスティバル」も、会員の記憶に深く残る大会の一つになった。

頼もしい同伴者

副会長 渡辺 真帆

目 次

現代俳句にいがた 第14号

巻頭言	渡辺 真帆	1
旦暮集	会員作品 (夕行先行)	2
秀句抄出 (第13号より)	小川 久子	17
	小林 悦子	17
	今井 愛子	18
	梶木 幸子	18
	石塚 しをり	19
第30回「にいがた俳句フェスティバル講演」		20
『コロナ禍の俳句生活』		
講師 「炎環」主宰 石 寒太 先生		
「にいがた俳句フェスティバル」入賞作品		24
通信句会報 第10回		26
第11回		28
第12回		31
第13回		33
長岡いちにち吟行会 句会報		37
事務局短信		38
編集後記		39
表紙写真	山口 冬人	
旦暮集 文字	早津 翠邦	
カット	八木 進	

表紙のことば

夏の天の川

山口 冬人

街灯の影響が少ない山間地に行くと夏の天の川を見ることができる。  
最近ではカメラとレンズの性能が良くなったので、人間の目で見えないものも写るようになった。

# 日暮時



(50音順・夕行先行)

夏は来ぬ

柏崎市 武本松久

春愁や吾子と距離置く感染症  
喪服脱ぎ窓を開ければ小鳥来る  
難聴の余所見して居る夏期講座  
パレードの子らの演奏風青し  
合唱の曲はポピュラー夏は来ぬ  
生き残る孤独や庭の草むしり  
悩ましき愚痴吹き飛ばす青嵐  
晩学と言ひびずに被る雪マント

麦の秋

三条市 高井年子

ふる雪の思考息づく木のかたち  
麦の秋しんとゴッホが狂った日  
いつかきつと花野に死後のきみと会ふ  
卒寿の賀みづから寒の鰯捌く  
鯉濃や雨にひかりの春の湖  
野を遠くして一冬木父逝けり  
狐火の尾の術中にはまる恋  
かなかなやをかしきほどに人を恋ふ

初鯉

柏崎市 田村美和子

鴨一家の初散歩らし溝伝ひ  
二人居の夕餉筍づくしかな  
春菊の湯通し五秒香味よし  
義弟から一本届き初鯉  
子育てはうるはしきかな軒燕  
はらはらと花の宰相崩れけり  
よく眠りよく食べ予後の夫の初夏  
信濃路の積石古墳苔茂る

待春

三条市 司雪絵

深呼吸してあたらしき年迎ふ  
初茜すくひて銀の匙ははへ  
粉雪や真昼淋しき町の川  
ことば忘れし待春の砂時計  
沈黙もことばのひとつ海鼠噛む  
読み聞かせし絵本のしみや鳥帰る  
春夕焼がれきの中のぬひぐるみ  
鳥引くや戦火の街の無辜の民

山笑ふ

三条市 中村梨枝

山笑ふ阿弥陀如来の煤け顔  
簡単に初恋などと言へぬ春  
尊しや平和憲法記念の日  
戦など止めてしまへとチューリップ  
薔薇真つ赤寂聴全集も  
四方へ飛ぶ防災無線アマリリス  
良寛の遺墨のやうな山桜  
新米や飢饉ある世を知らざりし

春の海

長岡市 中村命

雪解けの下に数多の命かな  
啓蟄や床を歩けば軋む音  
春暖の行きつ戻りつ春は来る  
梅林の芽吹くころとて群れ雀  
戦なき青空の下蝌蚪の群れ  
せせらぎの音の静かや水芭蕉  
山畑の鶯笛に和みたる  
釣糸を垂らしうとうと春の海

雪衾

長岡市 成保房子

川一本夕焼色の帯となり  
八月の広島にだけ吹く風のあり  
風すぢに母の気配や吾亦紅  
秋天ヘトランペットが届きさう  
大根を干して真白き村造る  
街を消し天より降り来る雪衾  
雪椿地底流るる瞽女の唄  
遠足の弾む声来て石ころがる

冬の花火

新潟市 成海 静

生れくる詩を待つてをり冬の夜  
自転車の立漕ぎが出来二学期へ  
本二冊大事に抱いて煤ごもり  
隠し田も捨田も雪にかくれけり  
雪を着て冬菜の畝がまるくなる  
鎮魂の冬の花火の白きこと  
梅一輪咲いていまさら家風など  
白鳥を見送りてまた畝を打つ

梅林

糸魚川市 早津翠 邦

風鈴よゆつくりでいいへたでいい  
「無量寿」の墨痕褪めて今日の秋  
北塞ぐ日本海の波を聴く  
身のどこか鎧ひてをりぬ枯るる中  
海飲むやうに生牡蠣を吸うてをり  
初桜咲くといふより枝に載る  
里山の風のルフラン糸ざくら  
梅林や兜太の鮫のつきまとふ

冬椿

新潟市 長谷川みきこ

黄落や地層の記憶堆く  
組板に数多の音や開戦日  
石人に冬木の光過ぎ行けり  
短日の一つ埋らぬパズルかな  
守るとふ深き言の葉冬椿  
土塊のこぼるる戸口年の神  
雛の灯を絶やさず待ちぬ星の客  
揚ひばり野の縁を行く押車

赤蜻蛉

糸魚川市 平野博之

田打桜ここは奴奈川姫の国  
見慣れたる港の明かり心天  
頬杖や越えねばならぬ青嶺あり  
八月や記憶にのこる防空壕  
鶴鴿やお気に召したる排気口  
凌霄花線路伝いに波走る  
水澄むやふるさとの山動かざる  
恐ろしや平和な国の赤蜻蛉

稲の花

長岡市 藤沢潮子

春愁の蹴るには大きすぎる石  
初夏の少女羽化する試着室  
一目惚れしてマネキンの夏帽子  
渡さるるバトンのやうな長茄子  
祈ぎ事の五風十雨や稲の花  
水底も快晴木の実落つる音  
毛糸編む時折夫に耳を貸し  
筋書きの無きが人の世去年今年

一年生

新潟市 藤田隆雄

担任も新採教師入学式  
まず最初吾が児を探す入学式  
履物をパパが揃えて入学式  
校門まで愛犬つれて入学式  
一年生金の釦が光ってる  
角曲るまで新一年生を見届ける  
登校の児に手袋をはめてやる  
ブランコの振り巾すこしずつ合せ

冬日

妙高市 古川よし秋

春の虹見て折り返す車椅子  
闇に来て闇の音なす落し水  
組板を修す冬日の匏屑  
朝市女へしやがむ目線の寒日和  
幕開けは撥の高鳴り雪時雨  
保存ネギ手に三本の余寒かな  
軒低し旧分校に春の月  
村落の一戸を映す植田かな

戦

糸魚川市 保坂季泉

夏燕ガラス割れたるままの家  
夫胸に在せり桜隠しの夜  
葎菜の根かの世まで引っぱり出せり  
曼珠沙華大地引き上げたごとく  
亡き夫の力を借りて雪を掻く  
平和待ち胸のつまりし桜かな  
サイレンにどきつと椿落ちにけり  
花万朶夢かうつつか戦の世

月曜日

柏崎市 星野祐子

啓蟄や小さき花壇のレイアウト  
涅槃西風遺言めきし古手紙  
束の間の冬晴れ捉へ小買物  
ギャラリイは蔵手作りの雛人形  
制服のやうやく馴染み五月晴  
盆僧はバイク村中みな檀家  
石路咲けり郵便を待つ月曜日  
割算の余りがひとつ冬苺

新緑の森

阿賀野市 柁木幸子

新緑の森に湯浴みのやうにゐる  
年長の子から飛び込む夏の川  
苦瓜や緩き暮しに慣れすぎし  
ありたけの日差ください野の花に  
日の淡し枯野は母のやうにある  
吾にもまた真つ新たな明日初硯  
どかと春雪ひかり満ち精気満ち  
移ろひは絵本繰るやう山若葉

冬帽子

糸魚川市 松野半畝

葉桜やじゃんけんぼんで決める鬼  
梅雨明やゆるり直江津行き発車  
紅むくげ子が聞く今日の晩御飯  
爽やかにラジオ体操第二まで  
丸椅子に欲しき背もたれ冬はじめ  
とまるたび一駅ごとの冬の雨  
耳かきの代わりの小指日向ぼこ  
前髪が眉毛に届く冬帽子

新豆腐

柏崎市 水野宗子

墨汁の白紙に滲む雨水かな  
香水を控へ目阿修羅像の前  
白靴を汚さぬ疲れ踵より  
湧き水の百年尽きず新豆腐  
鎌を持つ案山子今にも動きさう  
夫癒ゆる酢牡蠣するりと飲む力  
無配日のポスト凧棲みにけり  
高潮にうしろ姿の鴨ばかり

干戈

糸魚川市 八木進

現し世の干戈の響き冴返る  
竹の子を並べ干戈の地を想ふ  
イーゼルとトルソーのゐる春の闇  
惜春の毀釈地蔵に首のなく  
萱草や島に隆起の歴史あり  
廊下長し春愁の椅子ひとつ置き  
海に雪降る雪崩碑の献花台  
まなかひに春の海ある飛蚊症

蛙の声

阿賀町 山口冬人

村ひとつ蛙の声で浮き上がる  
千枚田蛙の好きな場所がある  
雪形の爺が手を上げ村動く  
葉をこぼれ露に光の重さある  
古封書に白紙一枚八月来る  
百匹の乾鮭を吊る怒涛音  
狐火や乱切り野菜煮えてをり  
地吹雪やうしろすがたの山頭火

春を待つ

糸魚川市 山田一風

春を待つ部屋着外着を掛けならべ  
雪解どき端の縮れる棗紐  
若葉風中丸見えの美容院  
聞き役に徹し減りゆくソーダ水  
かまつかや思ひ出ときに立ちはだかる  
水澄むやブラックバスを持ち込むな  
雲間より夕日のとどく社会鍋  
目に見えぬものを恐れて着ぶくれて

八十路

長岡市 吉川さが子

八十路にも末吉と云ふ初みくじ  
八十路なほ夢のかけらや青き踏む  
晩節の山独活を噛む味噌つけて  
かくすべき染み現るる更衣  
誰れよりも八十路たしかに粽結ふ  
笹の香の満ちる端午の厨かな  
粽喰ふ豊齡線を深くして  
つづきををる植田見てゐるシルバー席

命あるものの分けあう初明り  
 紅梅のこらえきれぬは幹に噴く  
 春来しと黒鍵の音うるみ来る  
 お隣も老人世帯こどもの日  
 散る牡丹深息ひとつほうと吐き  
 雑念のどんどん抜けて白紫陽花  
 コンパスの針どこに置く入道雲  
 つむじ風落葉溜まりは彩だまり

## 山ひぐらし

長岡市 米山 節子

手重りのして六月の備忘録  
 ぼんと背に夫の手の圧螢の夜  
 山ひぐらし煮炊の鍋に水を張る  
 白菜の胴を括るに寄する胸  
 赤子とは違ふ抱き方して湯婆  
 降る雪の我慢峠といふを越ゆ  
 鳥帰る雲の広がり見てをれば  
 むず痒き拳を宥め春を待つ

嘘一滴媚薬となりて春の宵  
 仮縫ひの鏡中に春生まれけり  
 花の雨銀のべールの占ひ師  
 流さるる遊びを日がな残る鴨  
 ゆらめくは煌めきとなりポプラ朱夏  
 夕蟬の一樹家郷のごと仰ぐ  
 私だけ知る棚奥の蝮酒  
 きちきちが飛びつき晴れてゆく気鬱

## 草笛

柏崎市 浅野 朝女

独り居の無言の修行春隣  
 大国の境抉りや彼岸冷え  
 人が人殺して地球野火と化す  
 初音らし香炉の灰均らしおれば  
 余り布手もずらかいて春惜しむ  
 野地蔵や子供の居ない子供の日  
 貧しさに絶えて草笛鳴らし居り  
 草笛やあの娘の消息途絶えけり

## こんな感じで

長岡市 有栖川 蘭子

落葉して人の姿になりにけり  
 寒雷やそこには何もいませんよ  
 飾焚く捨てた男はひとりだけ  
 否定からはじまるおんな黄砂降る  
 芍薬 散って夜に音 戻る  
 気に入らない愛する君よほととぎす  
 風鈴や他人の老いはなめらかに  
 水引草まだらでまばらな意識かな

## 百歳の後

新潟市 安澤 静尾

鮎のぼる越に豊かな大河あり  
 百歳の後の高野よ青葉木菟  
 寝釋迦にも似たる姿や雪解山  
 植田澄む水面に淡き昼の月  
 春を呼ぶ駅内ピアノの韻きあり  
 わが青春昭和に尽きし夏みかん  
 耳鳴りの何時より消えし夏の月  
 さくら隠しの頃に逝きたし妻の辺に

## 恋螢

妙高市 井澤 秀峰

料峭や巖嚙む潮の親不知  
 逆光の空へ帰雁の入り急ぐ  
 古城の月より枝垂るる桜かな  
 袈裟とれば少年の顔花まつり  
 ひとまづは自我に目覚めし北辛夷  
 可惜夜や消えたるあとの恋螢  
 空からの音して滝の真正面  
 蹠に砂おきあがる大暑かな

## 播粉木

上越市 石黒 英進

存分に淑気吐きたる明けの鐘  
 毛虫焼く咄嗟に習いの呪文誦す  
 過疎の地が今宵華やぐ揚花火  
 木犀の香や播粉木は減りどうし  
 米山を巨きく跨ぎ秋の虹  
 空風の逆鱗に耐ゆ浜の松まき 樺まき  
 不意に来る病魔の寒さ夜闇濃し  
 閃光が真闇切り裂く雪催い

谷空木

新潟市 石塚しをり

鳥雲に向かう大地に新たな火  
ふるさとの昔語りやなごり雪  
雪解川の清らまたぎの作る汁  
谷空木どう叫んでも届かない  
実山椒父を支えし母の指  
十二月八日錆びついたトランペット  
山裾を家とし平穩冬がすみ  
虚空よりひとひらふたひら六花

山河

長岡市 石塚吉江

夜の秋影のことりと夫の杖  
釣り上げし鯉の魚拓や大西日  
財宝の島がそこかも稲光  
人影のちらつく梵字盆の月  
煩惱は空にしてより寒に入る  
峠越えおどろおどろや雪の精  
雪吊解く内緒のはなし出来ぬ間に  
しやぼん玉山河まあるく毀れたり

未来

長岡市 伊藤一二三

アルバムの中へと続く春の川  
遠ざかる常の暮らしよ暮の春  
風涼し今年また同じシャツ着て  
語り部に子供ありけり原爆忌  
柿二つ昔のことを話し出す  
竹馬の高さにあるる子の未来  
浮寝鳥攫はれさうな夜を漕ぐ  
この雪の積もらねば美しきこと

未知との遭遇

糸魚川市 猪又秀子

草朧スコップ掛けの釘ゆるぶ  
上段は恩師の書籍匂鳥  
十二社の扉全開茗荷の子  
膝崩す畳一間の影涼し  
未知の地に未知の表札燕の子  
千国への道分の石葱匂ふ  
菊を焚くひとりにあまりある時間  
新暦画鋏の跡に差す画鋏

落鮎

長岡市 今井愛子

雪ざらし楮に余罪あるごとく  
冬晴れや川面の傷の治りゆく  
大いなる野望のごとく凍み渡り  
道乾く靴底軽し廻り道  
菜花挿す農の生涯母の忌は  
晩節は川の流れよ粽解く  
稲穂波ちんちんどんと田神乗り  
落鮎の潮となる夢焼れゆく

呱呱の声

新潟市 梅田知子

大震災の記憶を繋ぐ春の土  
若菜風胸のつかへを取り去りぬ  
いつの間に目線の高さ卒業す  
櫻若葉「ぐりとぐら」なる原画展  
八月や一ツの生命呱呱の声  
野薔薇のプールサイドやゲートの詩  
裸木の奥に秘めたる自己主張  
可惜夜の母子のはなし雪解川

浜昼顔

新発田市 大久保窓子

網を干すここが境界浜昼顔  
少子化や胡瓜ますぐ垂れさがり  
花伐父の田に入りくずれけり  
蛇口でて水片陰へたかぶれり  
日記買うならもう少し生きてやる  
冬耕の息継ぐ畝を高く盛り  
何ことも車座となる雪ぐらし  
朴訥な筍きれいに剥いてやる

お田植

新潟市 大島めぐみ

紅ほのか乙女椿を籠にかな  
物忘れ神に授かる茗荷汁  
母の日や子に伝えたき母の味  
発想は夏野の花を摘みてより  
争いの外ッ国思う蝶の行方  
天皇のお田植苗の真直かな  
空の青菜の花の黄やウクライナ  
早乙女の姿もありて棚田郷

牡丹の芽

見附市 太田チエ子

日脚伸ぶただそれだけでにんまりと  
使わざる割引券や昭和の日  
こたびまた一期一会の桜かな  
天領の名残りの家並み牡丹の芽  
しじみ汁しかと年金振り込まれ  
踏切を田植機のゆく夕日影  
参道の残雪割りて春祭  
牡丹や鍔絵の光る酒造蔵

紅葉

長岡市 小川久子

料峭やめまいに似たる夜の地震  
せせらぎの音を力に菖蒲の芽  
蟻の道たどりて森の美術館  
柿旨し命惜しいと思ふとき  
赤とんぼまなこくると我を見て  
冬もみじみんな笑っていなくなる  
音といふ言葉を消して雪の夜  
初詣人のうしろに普段着で

春の雪

長岡市 小熊千恵子

春の雪母の言霊舞ひ降りる  
やはらかく降り春雪に香のありぬ  
風薫る卓に野の物山のもの  
夏空の鏡となりて澄むダム湖  
必要とさるる手足や秋に入る  
どの風にも靡く薄の底力  
除雪機が主役の位置にカーポート  
我が吾を励ます独語雪止まず

不用意

長岡市 長部多香子

不用意にもらす言葉の寒さかな  
寒明ける守り袋に保険証  
山道の低きへ落花吹き溜まる  
山桜杖にすがりて右ひだり  
緋牡丹やこの世に飽きて崩れゆく  
遠雷や長押に飾る鬼の面  
着たがつてすぐ脱ぎたがる浴衣かな  
麦秋や征きて還らぬ兄のこと

月の階

新潟市 刈田光児

徒然なる暇に降る雪半跏趺坐  
半角英数字冬日躍らせ然にクリック  
雪国の春は空から混声合唱団  
言の葉がひらっと不明飛花落花  
牛蛙・鴉・水辺のトッカータ  
百物語佳境にかかり水の韻  
心臓が軽くなる秋光の透視  
螺旋階段昇る月への階をのぼる

雪

新潟市 北村美都子

雪が降る會津八一の仮名文字の  
雪いつか本降り縦の立ちつくし  
白紙千枚折鶴千羽雪無尽  
文香なまかうにそう名付けたき雪明り  
納骨の後の芳信ささめゆき  
転生は木になれるはず森に雪  
かげりつつひかりつ海へ涅槃雪  
あやとりの橋を来る妣はるのゆき

夏つれづれ

糸魚川市 倉又紫水

日だまりに蔭の葉巧みに重なりて  
青葉風ロボット歩きとなりてをり  
流星群蒼い光を海上に  
夏の夜の孤愁に充ちし弦の月  
夏深更水平線に月の入る  
大国のエゴに抗せよ黄水仙  
遠つ国に戦さのありて杜若  
新緑や四世代となる知らせ

覚醒その一

新潟市 栗城豊重

石鹼玉はかなき虹の露となり  
花虻に追われて幼児涙雨  
春苑や匂いをはなつ沈丁花  
雪間草芽ぶく力や見習いて  
藪入りて全譜並べる碁石かな  
小雪舞い吉兎告げる除夜の鐘  
夏の日や患者切り捨てNONと言ひ  
夏の日に世直し旗を次世代へ



黒姫山

糸魚川市

黒坂愛子

人生

柏崎市

近藤美好

坑道を抜け眩しきは秋の海  
秋天へ黒姫山を削る音  
黒姫の採掘場に独活の花  
鈍色の海へ消えゆく秋茜  
秋濤や大事な物を見失なふ  
木にのぼり無花果を取る八十才  
ふたりして秋の怒濤を逃げ惑ふ  
枯山に仄かに紅のひとところ

遠桜

三条市

小林悦子

遠弥彦山空の一気に春らしく  
ぶらぶらと鴉のあとを春の畦  
川波白く白鳥は帰りけり  
誰も来ぬ日や玄関の桃の花  
不用意に椿ずると踏みにつけり  
皆ちがふ珈琲頼み遠桜  
囀や洞にすつぽり地藏尊  
横並びの会食庭の若葉かな

大根蒔く

新潟市

佐藤 彬

有機無機肥料ととのへ彼岸入り  
遠出して昭和のかをる菜飯かな  
そこはそここは晩生の青田風  
館長は三十二代目藍浴衣  
呟きはひいふうみいと大根蒔く  
吹き抜ける空気のまろし葡萄棚  
魯田やMaxとき号ラストラン  
晩秋の灯ぼつぽつと鍬洗ふ

遠野

新潟市

志田すずめ

下向いて亡母と麦踏む遠野の地  
穂の芽の摘まれゆく瀬の樹液かな  
戦場の命儂し春遠し  
平和とうこの空青し花万朶  
サウナ室蚕棚のようにくねる影  
熊ん蜂通せんぼする苛めっ子  
空蟬やへその緒三つ手の中に  
産土の水場に晒す心太

五月来ぬ

三条市

清水美智子

彩雲や満ち潮上る秋の川  
裸木の碧空支ふ無一物  
頬白の去らぬ木のあり遊女の碑  
この旅が最後と先師鐘臈(川越)  
さみどりの絵の具刷くごと木々芽吹く  
黒髪を寄付する少女五月来ぬ  
さびさびと風待ち湊浜豌豆  
まくなぎ払ふ手死神を払ふごと

山の神

三条市

清水道徑

耕しや水もて奔る山の神  
追はれたる朱鷺の流転か雛躰る  
行く水や渡し場跡の蘆の花  
流木に何も咎なき虫浄土  
岬より海へ出でたる時雨虹  
里に雪熊よゆつくり眠りなさい  
二日はや古書店にあるわが句集  
わが影の宇宙へとどく深雪晴

海の町

新潟市

菅原あや子

「浄光」の字句肅々と千代の春  
海鳴りの轟く町の大旦  
お日さまの軌道たんぼぼ全開す  
高みより母の呼ぶ声さくらさくら  
朝焼の雲百態の海の町  
沖を視る頤まぶし合格子  
鮭を裂く通し土間より怒涛音  
彩雲をくぐりて戻る小白鳥

春は曙深き眠りの五弦琵琶  
湖風や梅林万の鼓動あり  
万緑の森をジュラ紀と思ひけり  
天と地の軸のずれたる梅雨豪雨  
殺意とふ寡黙なるもの毛虫焼く  
島影は志功の女体鳥渡る  
寒造り蔵に麴の呼吸音  
雪霏々と白は重たき色になる

協会事業にご参加ください！

●「現代俳句にいがた」に投句をお願いします  
県現代俳句協会の会員交流誌「現代俳句にいがた」は、今号で14号となりました。

毎年6月1日頃を原稿の締め切りとして句稿を募集しています。投句締め切り後に、今回は投句しませんとご連絡を頂いた方もいらっしゃいますが、作品には特に縛りはありませんので、ぜひ会員の皆様からご参加をいただきたいと思えます。

1年間のまとめとすることで、結社誌等の他誌への投句作品も出句可能ですので、原稿の依頼文書が届きましたら、ぜひご参加をよろしく願います。

●「いちにち吟行会」に参加しましょう

県内各地の景勝などを吟行する「いちにち吟行会」も県協会の事業の一つです。6月の長岡の「雪国植物園」の回は39ページで紹介してある通り、雨模様の中ではありましたが楽しく有意義に行われました。

秋には三条市で開催が計画されています。こちらでもぜひご参加をよろしく願います。

秀句抄 (第13号より)

小川 久子選 (2〜4頁)

豪快に窓を洗ひて更衣 佐藤 彬  
白鳥の今着きしこえ暗闇に 志田すずめ  
麻酔醒め春の女神か妻の声 清水 道徑  
田の神のための褥か雪ねぶり 清水美智子  
ひとり言も生きて行く術初しぐれ 菅原あや子  
陶枕や眠りて己れ消す時間 杉本 憲治  
人恋ふる色を虚空へ曼珠沙華 袖山 リエ  
3・11忌黙しては慟哭の海 高井 年子  
誤字多き祖母の手紙や麦の秋 武本 松久  
風通しよきは家風よ柿若葉 田村美和子  
ほつれたる記憶繕ふ針始 司 雪絵

大杉のかなづることし法師蟬 佐藤 彬

直立した幹と葉が青々と茂った杉の大樹から、まるで杉が奏でるように、つくつく法師の音がもれてくる。涼しくなった頃の法師蟬に心いやされる。

梅三分村の空気が動き出す 袖山 リエ

冬ごもりしていた農家の人々は雪が消え梅が咲き始めると農作業の準備に村が活気づいて来る。「空気が

が動き出す」に共感しました。

神苑の光をしぼる弓始 司 雪絵

弥彦神社の弓始が浮かんできました。白足袋に袴きりりとした姿で弓をひきしぼる緊張の一瞬を「光をしぼる」という表現に感動しました。

小川 悦子選 (5〜7頁)

庭あれば庭の片地に黄水仙 中村 侖  
ぼろぼろと小鳥降り来て寒固 早津 翠邦  
星月夜研究棟にひとつの灯 長谷川みき子  
牛つなぐ石もろもろや冬籠り 平野 博之  
夏休 昆虫図鑑から羽音 藤沢 潮子  
木曾駒の嘶き消えし夏野かな 藤田 隆雄  
夏鴨に田を植うるまで田を貸しぬ 古川よし秋  
寒念仏の声聞きたればよく眠れ 保坂 季泉  
愛用の傘低くさす青嵐 星野 祐子

春泥を跳んで眼鏡の外れをり 中村 梨枝

雪解けの小さなぬかるみを避けようと、ほんの軽く跳んだつもりだったのに、眼鏡が外れて。身のこなしが重くなったのに気付く時。

少年の髪触角となる夏よ 成保 房子

夏が来て、少年の頭からも蝸牛のように触角が生え出したよう。好奇心全開、無防備で無鉄砲。でもナイーブな一面も。夏のような少年期。

冬青空鬱といふ字のバラバラに 成海 靜

手強そうな鬱の字も、吸気が痛いほどの冬晴れには、硬質なものが少しのショックで粉々に砕け散ったように、粒子となり雲散霧消、心の鬱も。

今井 愛子選 (8~10頁)

全身が春の受信機土ほぐす 榎木 幸子  
初市を折り返すより流人めく 水野 宗子  
風読みて出る寒柝のこども組 八木 進  
しつかりと雪踏み神の道とする 山口 冬人  
日の差して畳一枚分の春 山田 一風  
藤垂れて紫の闇作りけり 横山 淑  
木の根明く鴉首より歩き出す 吉川さが子  
夕焼や裾濃の茜恋に似て 米岡 幸子  
きんぬぎ団子屋敷蛇にも馱りけり 米山 節子  
炎天や檻樓で越えし老爺嶺(中国東北部) 渡辺 真帆  
万歩計山の緑に拉致さるる 浅野 朝女  
朝寝して毒吐く力戻りけり 有栖川蘭子  
水旨きこの地より出ず新豆腐 水野 宗子

採り置き葱立ち上る春の納屋 安澤 静尾

越冬用に採り置いた葱は冬が深まるにつれ乾き、瘦せてくる。それが春になったら立ち上がった。葱の生命力と自然の摂理をよく見つけた句だ。

風光る一角に朝市の街 伊藤一二三

うららかな春を迎えた光溢れる街。その一角には朝市。地物の野菜や魚などが並んでいることだろう。生き生きとした明るい景が浮かぶ。

無言館出るや虚空へつばくらめ 梅田 知子

無言館は戦没画学生の作品館。「出るや」の一語で七十数年という「時」、状況、観覧者の気持ちまでがらりと変わる。「つばくらめ」が効いている。

石塚しをり選 (14~16頁)

亀鳴くや思い出すのは師の一句 大島めぐみ  
空襲も地震も潜り抜けし雛 太田チエ子  
梅雨蝶の真白く止る草の先 小川 久子  
名水を入れポリタンク春の音 小熊千恵子  
転生の夫のこゑかも小鳥来る 長部多香子  
夏霞佐渡は浮島かも知れぬ 風間 靖彦  
雲雀野の真中に青き指定席 刈田 光児  
子狐のおはなし小米雪ささささ 北村美都子

豆腐の旨さは真水で決まる。旨い豆腐を生涯食べられ、舌鼓を打つ作者の至福感が伝わる句です。

つづれさせ土の力のある暮し 米山 節子

つづれさせの鳴声に囲まれた、田舎の暮しがあるからこそ良句が生まれてくる。新鮮な野菜は長生きの秘訣です。

目覚めよきことが吉日青木の実 渡辺 真帆

この句に目覚めさせられました。人生は金銭ではないよと教えられました。青木の真紅の実が、幸先良きことを表現しています。

榎木 幸子選 (11~13頁)

一つとは無数のはじめ蟻の道 井澤 秀峰  
薔薇光るその辺りまで歩きたし 石川富美子  
必ずや来る雪の果伽藍守り 石黒 英進  
新樹光還暦のページをめくる 石塚しをり  
草笛を吹く少年の虚空かな 石塚 吉江  
菜の花やおぼろは涙もろくする 伊藤 亨子  
鳥雲に入りて切株残りをり 猪又 秀子  
冬天の薄日を煽る箕の忙し 今井 愛子  
夏大根引く思わざる反抗 大久保窓子

晩春の潮騒人が話すと 倉又 紫水  
帰り際湖に消え入る黒揚羽 黒坂 愛子  
葉桜やすこし曲がりて姉の文 小林 悦子  
土鈴雖振れば昭和の音さびて 近藤 美好

老梅の芽吹く力のゆるぎなき 大島めぐみ

自宅の庭の老梅か。その芽吹きが何を持ってしても負けない力強さに感銘している。又、作者も老梅の芽に励まされ今を生きようとする姿。

鶏頭のひだの奥より暮れゆけり 長部多香子

鶏頭の花のひだは分厚く独特。その折り重なったひだの奥に注目した手柄。そこから日が暮れていく事を感じとった発見の妙。

吊り下げし鮭の眼高に闇迫る 風間 靖彦

梁から吊り下げた鮭のいかつい形相を(眼高)と(闇迫る)の措辞で見事に表現し、世界情勢の緊迫感をも感じられる。

## 第30回「にいがた俳句フェスティバル」講演

令和4年3月21日・於 三条東公民館

# 『コロナ禍の俳句生活』

講師 「炎環」主宰

石 寒 太 先生



まず、私自身のお話から始めたいと思います。

### 《夜型から昼型の生活に変わった》

今までは、昼間は出掛けていろいろな活動をしていました。そして、夜は遅くまで俳句の選句、選評、執筆をする暮しでした。しかし、コロナ禍以後は、外出の自粛が続き昼型生活に変わりました。

### 《早起きと散歩の習慣がついた》

朝食前に散歩をします。歩いて十分程の距離に娘家族の家がありますので、その家をぐるりと巡って、近くの公園を散歩します。帰るとちょうど朝食の時間になります。

今まで動・植物のことはかなり識っていたつもりでした。が、じっくり観る時間がなかった。でも、梅の花の萼、それが一輪咲き、満開になり散って、そして若葉に移り変わり、青梅になっていく。そんなゆっくり移り変わっていく状態などをしっかり目にしました。毎日見たこととは無かった。これを定点観察と言いますが、頭の中では識っていても、目を追っての変化を観察することは無かったです。



### 《はじめに》

皆さんこんにちは。ただ今ご紹介いただきました石 寒太と申します。

会場を見渡しますと、本場に懐しいお顔や久し振りのお方もいらっしゃいます。この会が三年目にしてようやく実現できて良かったな、と思っております。

私の本名は石倉で、石の下に倉が付くのですが、最初俳句をはじめた頃はこの名前で「寒雷」に投句しておりました。ある時、主宰の加藤楸邨先生から電話がかかってきました。「君の俳号は明日から石 寒太にする」と言われました。後日、その意味を伺いましたら「君は倉は建たないから倉は取った」とのことでした。以後ずっと石 寒太で親しんでおります。

さて、この会には三年前に講演を依頼されておりました。はじめはいろいろとテーマを考えていました。一年目コロナ禍のため延期になり、次の年も終息せず中止になりました。ことしもたぶん無理だろうと思っていたところ、事務局長の佐藤彬さんから二週間前にご連絡があり

ね。コロナ禍は私達の生活を変えてしまいつらかったけれども、今まで以上に自然をゆっくり見詰めることができました。これは良かったことのひとつです。

### 《書籍・手紙・写真類の整理》

私は断捨離という言葉はあまり好きではありませんが、今まで溜めてあった本類や資料を片付けました。少し整理しよ

「蔓延防止等重点措置が解除になり開催しますので、いま講演のテーマを教えてください。」と、突然言われました。そこで、今の状況を考えて「コロナ禍の俳句生活」とさせて頂いたわけです。

今日三条駅に降り立ちまして、非常に懐かしい記憶が甦りました。三条は以前にも何回か訪れております。まだ俳句を初めて間もない頃でしたが、楸邨先生と一緒にしました。季節柄夕立がありました。その折りの即吟ですが、

夕立のしらしら晴れて刃物町 寒太

三条は金物町ですね。やがて、三年前に新型コロナウイルスという未知の疫病が襲って来て、私達の生活は一変してしまいましたね。最初の頃はすぐに収まるだろうと高を括っていたのですが、次第に世界中にひろまり自粛生活を強いられるようになりました。

俳句仲間の手紙や周囲からも「コロナ太り」「コロナ疲れ」「コロナ鬱」という言葉が聞かれるようになりました。皆様もいろいろと戸惑いながらも過ごされた三年間だったと思います。

うという気持ちになりました。それは、本や雑誌が増え過ぎて、執筆のために必要な参考資料が、何処かにあるのだけれどすぐには見つからない。締切りが迫るので仕方なく新たに購入したり、図書館に出掛けて調べていたからです。ところが整理していると、同じ雑誌や単行本が数冊もあり、驚いたことに、四冊もダブっていたものもありました。これは整理して初めてわかったことです。

特に句集類が沢山ありましたね。句集は出版部数が少ないので貴重なものですので、初版本は大切に取って置きます。が、今は句集もインターネットで見られる時代になりましたね。だからこれも整理しました。

また、手紙やアルバム類はダンボール箱に収めていたのですが、手をつけはじめました。でもどれも懐しさからつい読み返してしまっ整理が進みません。特に楸邨先生からのお便りは纏めて保存してありました。ですが、子供が切手蒐集をしていた頃のは、切手と一緒に中の手紙までジョッキジョキと切られていて、

とても残念なものもいくつかありました。私には三人子供がいるのですが、すべて先生の命名です。楸邨先生は子が誕生した時は名前をつけて、命名にちなんだオリジナルの句を詠み、色紙に書いて祝って下さいました。長男に先生が名前をつけて下さったところは、誕生の子にまだ会ったことが無いから、ぜひ連れておいでと迎えました。小学生になったかならなかった頃のことです。先生のお宅近くの中華料理店で会う約束をしました。ところが約束の時間が近づいても息子は遊びに行きたまま帰って来ません。今の時代と違って、ケータイやスマホもない。先生に連絡も出来ません。仕方なく諦めながらも数時間後にもう、いらっしやらないだろう、と約束の店に行っただけです。でも先生はずっと待っていて下さった。「よく来た、よく来た」とニコニコと嬉しそうに迎えて下さいました。その時の事を綿綿と書いて下さったお手紙もありました。先生がお元気な頃に、もっと子供達のことなどのお話をしたかった、と悔んでも、もうこの世にいらっしやいません。

他に金子兜太、森澄雄、飯田龍太、深見けん二、稲畑汀子さんなど、しみじみ手紙を読み返しつつ、結局また元の箱に収めて、断捨離にはなりませんでした。『俳句歳時記』の監修

（二〇二二年二月五日初版発行）

数年前に出版した『歳時記』よりも小型で携帯用です。オールカラー写真で、執筆も書き変えました。例句は俳人の秀句以外に、各分野で活躍している人の秀句も、広く収めました。

お陰様で好評です。今第五刷が出たところです。先程この本を購入して下さいた方にサインをした（かろき子は月にある）句は、楸邨命名の先の子



供達が小さかった頃の句です。忙しくて一緒に遊んでやる時間ありませんでしたが、ある夕方、肩車をしてやりましたら、その子が思ったよりも軽くてびっくりしました。ああ、この子を月に「あずけてしまいたい」そう思った。その印象を詠んだ句です。ご縁がありまして、ある教科書に採用していただいた句でもあります。

『句集の出版をお勧めします』

俳句仲間の人達にも、俳句作品が溜まっている方が多くいらっしやいます。コロナ自粛の際、句集に纏めて出版することを勧めております。

句集を読むとその人なりの生き方、歴史がよく解ります。コロナ禍以来、私がお勧めしてから出版された方が何人かいらっしやいます。お勧めして良かったなと思えました。

『読みたかった本をじっくり読む』

今まで積んでいた本の中から読みたい本をゆっくり読み直しましょう。

私は、芭蕉に関する著書は沢山あります。この自粛の時に、次に書く『与謝無

村』を、もういちど最初から読んでみました。蕪村は江戸中期の三大俳人で画俳一如と言われた一人です。俳句と画を一つにして写実の句の他に、歴史に材を得た境地を出そうとした句もありますね。

鳥羽殿へ五六騎急ぐ野分かな 蕪村

皆さんは、蕪村は写実的な句が多いという印象をお持ちかも知れませんが、老らくの恋の句、その他もつと虚実皮膜の句もあって多彩です。こんな面もあったのか……と思わせられる。面白い。一筋縄では行かない人であることがわかります。「謎の俳人です。」

《おわりに》

最初の頃は、コロナ禍というものが重くしかかってきて、ネガティブで嫌でした。でもこんなに長く続くのなら、ポジティブに「ウィズコロナ」でコロナ、とマイペースで生活してゆこう、そう考えるようになりました。

「明けない夜は無い」と言います。知恵を絞って前向きに過ごしましょう。ご静聴ありがとうございます。

（文責 渡辺真帆）

### 講師 プロフィール

石 寒太 本名・石倉昌治。  
1943年、静岡県生まれ。  
1969年、「寒雷」に入会、加藤楸邨に師事。楸邨の直弟子となる。  
1989年、「言葉にも心にも片寄らず、炎のような情熱と人の環を大切にする」をモットーに「炎環」を創刊、主宰。  
俳句総合誌「俳句あるふあ」（毎日新聞社）創刊・初代編集長。毎日文化センターNHK俳句教室、朝日カルチャーセンター講師、他。  
句集に『あるき神』、『炎環』、『夢の浮橋』、『翔』、『生還す』、『以後』、『風韻』他多数。評論、随筆等著書も多数。

### フェスティバル・カメラスケッチ



◀挨拶をする  
清水道徑会長

▼石寒太先生の講演を  
熱心に聞く参加者



▶著書『俳句歳時記』に  
サインする石寒太先生

◀うれしい入賞者表彰式



第30回「にいがた俳句フェスティバル」入賞作品

兼題の部

投句者二七〇名・投句数一一九四句  
特選2点、佳作1点、同点の場合は受付順

順位	得点	入賞	作品	住所	俳号
1	8		屋敷蛇残して家を売りにけり	阿賀町	山口 冬人
2	8		嬰に指握られてをり開戦日	長岡市	星野 榮子
3	7		和紙を揉む音とも夜のささめ雪	長岡市	長部多香子
4	7		振り向かぬ雪女なら跳いてゆく	宮崎県	早稲田良子
5	6		煤払い遺影の妻を抱きおろす	南魚沼市	荒川 完石
6	6		しなやかな重機のアーム白鳥来	新潟市	樋熊 節子
7	5		八月や忘れ去られるほど生きて	長岡市	長谷川千代野
8	5		さくら隠しのころに行きたき妻の辺に	新潟市	安澤 静尾
9	5		正月の花活けコインランドリー	新潟市	遠藤 直子
10	5		積む薪の隙間隙間の寒月光	埼玉県	伊藤千代子
11	5		粉雪や真昼淋しき町の川	三条市	司 雪絵
12	5		雪解光縦横斜め村襲ふ	長岡市	下條 春秋
13	5		煮凝や夢もつつも怒濤音	柏崎市	水野 宗子
14	5		明日からは実家の米ぞ新米ぞ	長岡市	田村 藤枝
15	5		一村がじっとしている初景色	魚沼市	酒井 昭平
16	4		アネモネの花芯に潜むルドンの目	長岡市	木曾 武子
17	4		蒟蒻の裏を並べて長閑なり	三条市	関川 芳弘

18	4		会葬の列に犬る春の雪	埼玉県	増田 信雄
19	4		伊夜日子の裏も表も残る虫	三条市	宮島 敏明
20	4		包丁の抜けない冬至南瓜かな	新潟市	遠藤 直子

入選

1	4		桜餅食むたび揺るゝイヤリング	燕市	金子加津久
2	4		蛇全長見せて黙秘権という	埼玉県	金子 斐子
3	4		地の涯の雲は道化師冬茜	新潟市	和田 雅子
4	4		今日の白あらたに窓の皮を剥く	長岡市	伊藤一三三
5	4		大事みな小事となりし暦果つ	三条市	久和原 賢
6	4		下駄箱に冬が来てゐる大家族	三条市	久和原 賢
7	4		日曆の一枚ごとの寒さかな	三条市	久和原 賢
8	4		短日や影絵のやうに貨車の過ぐ	柏崎市	水野 宗子
9	4		山の水引きし湯殿の飾菓	柏崎市	水野 宗子
10	4		大根煮る学歴尋常小学校	新潟市	藤田 隆雄
11	4		水準器めく気泡あり初水	燕市	飯塚 白山
12	4		朝焼や雲百態の海の町	新潟市	菅原あや子
13	4		雪となり魂もどる山河かな	新潟市	坂井カツ子
14	4		野を遠くして一冬木父死せり	三条市	高井 年子
15	4		狐火の尾の術中にはまる恋	三条市	高井 年子
16	4		うまおひや漁具のおふるる通し土間	出雲崎町	仲野 隆之
17	4		鱧汁や佐渡と原発すぐそこに	長岡市	小間 貴夫
18	4		春の雪縋絵の鶴のふくらめり	新潟市	細島 正志
19	4		長靴の似たり寄つたり年忘れ	魚沼市	大島いと女

席題の部

席題 「か」と読む漢字、但し季語は不可  
(令和4年3月21日 三条市東公民館)

順位	得点	入賞	作品	住所	俳号
1	13		現し世の千戈の響き冴返る	糸魚川市	八木 進
2	10		刃物研ぐ鍛冶春風の中にあるて	三条市	佐野 哲之
3	9		産見舞一荷は母の草の餅	長岡市	米山 節子
4	9		戦渦へとイマジン歌ふ弥生かな	加茂市	番場勢津子
5	8		帰る鳥河岸段丘越えにけり	三条市	清水美智子
6	8		冴返る鍛冶町火床の火が真つ赤	三条市	清水 道徑
7	8		過不足のなき晩年や芽吹風	阿賀町	波田野雪女
8	7		やはらかに降り春雪に香の有りぬ	長岡市	小熊千恵子
9	7		雲雀野やはるか戦禍の空真青	長岡市	伊藤一三三
10	7		もの忘れするたび進化梅白し	長岡市	吉川さが子
11	7		母の歩のゆらゆら過去へ花吹雪	三条市	小林 京香
12	7		過不足のなき生活なり春シヨール	三条市	久和原 賢
13	6		理科系に合格すこし大人びて	新潟市	成海 静
14	6		戦火なき土筆大地を歩み初む	長岡市	今井 愛子
15	6		コロナ禍の春の名残りの投句箱	東京都	曾根新五郎
16	6		鳥の恋戦火の街のペランダに	新潟市	北 悠休
17	6		鳥帰る戦禍逃れて来る人も	新潟市	寺尾亜真李
18	6		手を嚙んで謝らぬ猫春寒し	三条市	宮島 敏明

19	6		春や子の死にたくないといふ戦火	新潟市	花押 雪
20	5		卒業の以下同文を繰り返し	長岡市	縄 文人
次点	5		薄水や戦争直下にある命	長岡市	黒崎千賀女

■にいがた俳句フェスティバル  
3月の春分の日前後に開催予定  
会員の皆さんのご参加お願いします

「にいがた俳句フェスティバル」は、今回は31回目になります。例年3月の春分の日前後に三条市で県現俳の総会と合わせて開催されます。フェスティバルでは、俳壇で活躍中の俳人の講演とその講師の出題する「席題句」の競詠などもあり、楽しめる集いとなっています。

日程等決まりましたら兼題句の募集要領など詳細をお知らせしますので、ぜひご参加をお願いします。

# 通信句会報

## 第十四回句会

順位得点

作 品

作 者

- ① 塗り上げし畦一本はわが背骨 成海 静
- ② 川一本夕焼け色の帯となり 成保房子
- ③ 滝音は民の慟哭 廃村碑 小熊千恵子
- ④ 田水引くどつと青空入り来る 藤沢潮子
- ⑤ 不機嫌な十七才に夏が来る 成海 静
- ⑥ 天と地の軸のずれたる梅雨豪雨 袖山リエ
- ⑦ なるがまま生きて卒寿の菖蒲風呂 浅野朝女
- ⑧ 青田風入れて法話の持ち時間 古川よし秋
- ⑨ 天空へ素足の跳ねる乳母車 成保房子
- ⑩ 山藤や海が見たくて咲きのぼる 司 雪絵
- ⑩ 時の日の時の止まれる時代館 水野宗子
- ⑩ 菊葉の珠の揺れてる雨読の日 吉川さが子
- ⑩ 殺意とふ寡黙なるもの毛虫焼く 袖山リエ
- ⑭ 我に向く水鉄砲と云う兵器 藤田隆雄
- ⑭ ゆくゆくは銀河の浅瀬泳ぎたし 渡辺真帆
- ⑭ 名月やシャッター街という夜景 藤田隆雄
- ⑭ 奥杜へと青葉時雨を潜り行く 藤沢潮子
- ⑭ 触れもせず体温測る冷房館 星野祐子

- ⑭ B面がなぜか好きです霞草 山口冬人
- ⑭ 自由とは淋しきものよ笹綜 浅野朝女
- ⑭ 降り立ちて人なき駅や桜の実 井澤秀峰
- ⑭ 担がれて夕陽にひかる草刈機 古川よし秋
- 6 海を来て千枚青田の風となる 風間靖彦
- 6 小満や少年にある力瘤 早津翠邦
- 6 郭公や朝いちばんに開ける窓 小林悦子
- 6 人形に人の匂いの薄暑かな 風間靖彦
- 6 朽ち舟や浜屋顔の群れ咲ける 保坂季泉
- 5 草を取る己が影に脆き 水野宗子
- 5 時の日の体内時計狂ひ無し 猪又秀子
- 5 草を引く孤独の良さを知り初めて 小熊千恵子
- 4 軍服の影と話せり薄暑かな 伊藤亨子
- 4 聖火トーチ掲げよ早苗活着す 米山節子
- 4 日焼けして甘えん坊が少年に 星野祐子
- 4 ぐずぐずな私もわたし豆の花 榎木幸子
- 4 道路鏡奥に吹雪の村沈む 長部多香子
- 4 曇天を押し上げて咲く花石榴 菅原あや子
- 4 人も蟻も息抜きがあり明日がある 石黒英進
- 4 更衣村のしがらみ脱げぬ老い 今井愛子
- 4 父の日や戦の話聞けぬまま 保坂季泉
- 4 一箸の崩す半生冷奴 古川よし秋
- 4 生かされて励む老後の草むしり 武本松久
- 4 老鶯やそろりとめぐる句碑の裏 司 雪絵

- 3 夏燕ガラス割れたるままの家 保坂季泉
- 3 薫風や丸々戦後生き抜きぬ 太田チエ子
- 3 あすは明日過ぎたることの皆おぼろ 浅野朝女
- 3 消防ホース干され青嶺の早仕舞 早津翠邦
- 3 地球の影容れてうるうる夏の月 渡辺真帆
- 3 北限に茶摘み小町の日和かな 大島めぐみ
- 3 一寸も時は止まらず沙羅の花 榎木幸子
- 3 田の水のゆらめき止まず風薫る 太田チエ子
- 3 撃あとの梁どつしりと昼寝人 井澤秀峰
- 3 真菰ゆれ孤を描くものぞ何かるる 黒坂愛子
- 3 若葉して土偶岩偶膨らめり 小林悦子
- 3 ウイルスに切り株という自由席 大久保窓子
- 3 流れゆくものを遠くに摘草す 長部多香子
- 3 花びらに風の壁増す白菖蒲 菅原あや子
- 3 おはようとおやすみと愚痴巢の燕 米山節子
- 3 緑差す腕遅しきダビデ像 水野宗子
- 3 田の隅にそよいでをりぬ余り苗 成海 静
- 3 蔓荊のかこむ伏せ舟出番待つ 黒坂愛子
- 3 初夏や妙高山を降りる風 太田チエ子
- 3 不要不急中を去就の春の雲 刈田光児
- 2 川蜻蛉ひらひら今日も生きてゐる 八木 進
- 2 越後三山春満月と同居せり 成保房子
- 2 弟の眠る裾野に著莪の花 黒坂愛子
- 2 病棟を出てしばらくは青田中 井澤秀峰

- 2 かたくなにわが身突きだす心太 大久保窓子
- 2 実家へと半纏木の花あかり 石塚吉江
- 2 空梅雨や鍾馗大臣四股を踏む 山田一風
- 2 隠沼にさざなみ残る若葉風 八木 進
- 2 白バラの光の束を存分に 伊藤亨子
- 2 虹の橋棚田と池と光りあふ 石塚吉江
- 2 書き直す旅のリストよ田が青む 山田一風
- 2 夕薄暑宅急便の不在票 藤沢潮子
- 2 抽出しの薔薇の石鹼梅雨湿り 榎木幸子
- 2 廃車してわたしが昏れる梅雨半ば 吉川さが子
- 1 スカーフの絹より春の匂ひせり 長部多香子
- 1 新聞は午前四時半紫蘭咲く 安澤静尾
- 1 絵ごころを誘われ見つむ植田風 大島めぐみ
- 1 聖火来る少し高きに枝蛙 山口冬人
- 1 蕺菜の花夕暮のチャイム鳴り 石塚吉江
- 1 師の慕ふ匂もまた親し草田男忌 菅原あや子
- 1 灯台にあらぬ灯台大西日 山田一風
- 1 花桐や姉の遺品の硯箱 小林悦子
- 1 塩辛き口中の飴たぐさ月 猪又秀子
- 1 亀飼うて鳴く日を託す一万年 山口冬人
- 1 山雪の造形くずれ田水張る 伊藤亨子
- 1 青葉闇フォッサマグナの風の色 司 雪絵
- 1 しゃばん玉飛ばす子追う子天地の子 刈田光児
- 1 安兵衛の刀身清し夏の蔵 佐藤 彬

1 たかなや雪禍の悪夢日々つものり 石黒英進  
 1 溪空木揺らせば走る鳥親子 安澤静尾  
 1 藤村の「初恋の詩」花りんご 大島めぐみ  
 1 ママ一人だけのお店やスイートピー 藤田隆雄  
 1 獣園の咆哮ひびくえごの花 袖山リエ  
 1 朝焼の窓開く吾に鴉鳴く 佐藤 彬  
 1 雨一日互ひの黙に喰むバナナ 今井愛子  
 1 断捨離はせぬと決めたる五月晴れ 小熊千恵子  
 来し方の一切一紙に新年度 石黒英進  
 父の日を知らぬ戦を嫌いという 大久保窓子  
 神杉の高きを仰ぎほととぎす 早津翠邦  
 薔薇の庭巡る姉妹は百五十歳 中村梨枝  
 コロナ風聖火リレーもコンパクト 倉又紫水  
 えご練りや汗の仁王となりし貌 今井愛子  
 岸壁は夜釣危険と波吠える 武本松久  
 凌霄花咲くや大樹にならんとす 風間靖彦  
 境内の草取り鎌をさくさくと 佐藤 彬  
 リラの花下校する子等リラックス 刈田光児  
 石菖に朝の扉を開け屋敷神 八木 進  
 運動会いまは昔の朝花火 安澤静尾  
 永き日を急がば廻れくたびれて 中村梨枝  
 夏夕日コロナの収束祈るのみ 倉又紫水  
 荒波や岸をさ迷ふ夜釣の灯 武本松久  
 火の跡の残る山荘草茂る 吉川さが子

■第十一回句会

順位得点 作 品 作者  
 ① 23 鎌傷も草傷もあり日焼けの手 成海 静  
 ② 13 蟬時雨黙禱の宙重くなる 石塚吉江  
 ② 13 夏空の鏡となりて澄むダム湖 小熊千恵子  
 ④ 12 雲の峰スクラム組んで勝ちにゆく 米山節子  
 ⑤ 11 寺を継ぐ声良き読経風青し 小熊千恵子  
 ⑤ 11 聞き役に徹し減りゆくソーダ水 山田一風  
 ⑦ 9 麦秋や征きて還らぬ兄のこと 長部多香子  
 ⑧ 8 ゑほん室涼し正座の母と子に 渡辺真帆  
 ⑧ 8 夏空へ捧げる如くシート干す 長部多香子  
 ⑧ 8 耳遠し母に八月十五日 藤田隆雄  
 ⑧ 8 朝涼や通し土間より佐渡が見ゆ 石塚吉江  
 ⑧ 8 梅雨出水地球は瑕を深めたる 袖山リエ  
 ⑧ 8 夏草に追はれる日々や詩の遠し 吉川さが子  
 ⑭ 7 緋牡丹やこの世に飽きて崩れゆく 長部多香子

⑭ 7 ショート寸前真夏日の思考回路 藤沢潮子  
 ⑭ 7 工事車の電柱乗せてくる炎暑 司 雪絵  
 ⑭ 7 花茗荷都会暮しを知らぬまま 星野祐子  
 ⑭ 7 万緑の森をジュラ紀と思ひけり 袖山リエ  
 ⑭ 7 青楓源氏読むとき手を洗ひ 成海 静  
 6 八月や非常時の水入れ替へて 小川久子  
 6 晴耕に四肢をはげます蟬時雨 石黒英進  
 6 平穏の中の不安や新茶汲む 太田チエ子  
 6 雷雨去り畑は獣の匂ひめき 今井愛子  
 6 凌霄の闘志に呼気のみさう 今井愛子  
 6 風死すや街に戦災資料館 司 雪絵  
 6 病む母の部屋の窓開け庭花火 武本松久  
 5 あでやかに装ひわたり毛虫です 榎木幸子  
 5 ゆらめくは煌めきとなりポプラ朱夏 渡辺真帆  
 5 時に励まし時に居直り親燕 大島めぐみ  
 5 海風を孕ませたむサマードレス 水野宗子  
 4 藻の花は魂への灯し空襲忌 今井愛子  
 4 夏椿ポトンと落ちて友逝けり 伊藤亨子  
 4 錆色の一升瓶に 蝮酒 水野宗子  
 4 ハンカチに疲れの見える夕べかな 成保房子  
 4 放流のダム湖の感喜夏うぐひす 中村梨枝  
 4 笑ひ声秘話も飛び交ふ暑氣払 武本松久  
 4 あっちええと草の匂ひの夫戻る 吉川さが子  
 4 烏瓜の花脳外科の診察日 小林悦子

4 中干しの田を見舞ふやに夜の雷雨 米山節子  
 4 残業のビルの夏の灯正方形 成保房子  
 4 ひと小節ほどで初蟬鳴き止みぬ 藤沢潮子  
 3 蛞蝓手許のそこに死角あり 藤田隆雄  
 3 梅雨明や空につづける青き能登 黒坂愛子  
 3 セザンヌの見し夏色と同じ青 成保房子  
 3 銀河濃し海の鼓動を踏みしずめ 大久保窓子  
 3 大き蝦蟇この家の主と居座われり 井澤秀峰  
 3 昨日見し今朝も見に行く蛇の衣 山口冬人  
 3 遠雷や畑の婆の早仕舞 小川久子  
 3 風鈴の屋のためいき夜の吐息 早津翠邦  
 3 味加減は母の手加減瓜漬かる 星野祐子  
 3 普段着の一期一会の若葉風 太田チエ子  
 3 さくらんぼ箆笥の隅にラブレター 黒坂愛子  
 3 マラソンのゴール熱砂に脆く 武本松久  
 3 めぐまれてお化けとなりし夏大根 佐藤 彬  
 3 となり村の夕立が来る気配かな 山口冬人  
 3 ポプラの絮奔放に舞ふ休館日 渡辺真帆  
 3 水を守る人の気配や畦の闇 井澤秀峰  
 3 子等よりて赤黄緑夏料理 大島めぐみ  
 2 田の沖へ旋回をして去ぬ燕 吉川さが子  
 2 藤村と仲良しである梅雨籠り 成海 静  
 2 いちにちの日焼大事に海を去る 大久保窓子  
 2 コロナ禍も千の風鈴鳴る神社 大島めぐみ



2 土寄せにひと目五匹の雨蛙 佐藤 彬  
 2 鉢一つ倒して去りぬ青嵐 古川よし秋  
 2 蚕時雨を聴きし昭和の窓明かり 山口冬人  
 2 草も木も息ひそめて土用丑 倉又紫水  
 2 濃紫陽花札所参りのをんな坂 八木 進  
 2 棕櫚の花日はてらてらと海に満つ 井澤秀峰  
 2 サーフアーに舞の自在や海の蝶 安澤静尾  
 2 白百合の夫命日に間に合いて 伊藤亨子  
 2 陣痛の子に添ふ梅雨の満潮時 菅原あや子  
 2 滔滔と米若節や天の川 大久保窓子  
 2 ひとふりの槍を長押に雨蛙 早津翠邦  
 2 汗しとど古刹守りし朝の作務 石黒英進  
 2 隠江に白波寄せて秋近し 山田一風  
 2 涼しさや小石に経文の一字 小林悦子  
 2 日輪に梅干し委ね吾が時間 榎木幸子  
 2 非常食の無駄を祈るや颯風来 星野祐子  
 1 一族に夕餉賑はふ冷し瓜 安澤静尾  
 1 遠水鶏木簡出でし郡衙跡 袖山リエ  
 1 海平ら日差しまぶしき合歓の花 菅原あや子  
 1 後は鳥にブルーベリーの網外す 小林悦子  
 1 群肝の心に沁みる掌の清水 刈田光児  
 1 子どもの影かくかくと落ちゆけり 山田一風  
 1 朝日眩しき里山の茄子の紺 猪又秀子  
 1 鍵盤に十指つまづき夏の蝶 石塚吉江

1 渚胡桃こんな所に息づきて 黒坂愛子  
 1 螢袋アリスの国の雨の宿 菅原あや子  
 1 雨読あり視野に灯りぬ半夏生 石黒英進  
 1 形状記憶炎帝立山曼荼羅図 刈田光児  
 1 水着とりどり地下街の飾り窓 水野宗子  
 1 帰りしな夕餉へ摘めり茗荷の子 古川よし秋  
 1 ピーマンを残してパパの誕生日 藤田隆雄  
 1 開きさう開かぬ百合の蕾かな 中村梨枝  
 1 五色ペンが主流の机原爆忌 猪又秀子  
 1 日輪は能登の沖にと夏茜 倉又紫水  
 1 陸続とマスク往く駅夏に入る 太田チエ子  
 1 夜濯や揉みほぐす泥あたらしき 古川よし秋  
 1 大愚の寺にもおなじ花南瓜 早津翠邦  
 1 電線の鴉に見られ松手入れ 中村梨枝  
 1 黍畑はしやぐ鳥追いカイト鷹 佐藤 彬  
 1 三伏や使はず残る接種券 八木 進  
 1 家に居て観戦二人夏五輪 倉又紫水  
 1 紫陽花は風のあしあと亡夫来る 伊藤亨子  
 1 コーヒー熱し滝見ゆるテラス席 藤沢潮子  
 1 無観客の聖火勵ます灸花 安澤静尾  
 1 炎昼や師の句碑を守る親子猿 猪又秀子  
 1 日の辻の青田蓮の田豆畑 司 雪絵  
 1 若人の大き円座や夏の川 榎木幸子  
 1 雨音の重なり遂に梅雨に入る 小熊千恵子

■第十二回句会

順位得点

作 品

作 者

親よりも機敏な子猿平泳ぎ 小川久子  
 瓜茄子の太るやうなる飯の盛り 米山節子  
 円周率きんばえの金来る早さ 刈田光児  
 夏草やチャンバラごつこの木の刀 八木 進

① 13 父母に逢ふごと稲架の香を抱き 今井愛子  
 ① 13 一軒で村が無くなる茗荷の子 山口冬人  
 ③ 12 これよりは力抜く日々今年酒 大島めぐみ  
 ④ 11 月天心還らざるもの呼んでみる 石塚吉江  
 ⑤ 10 櫓田やMaxとき号ラストラン 佐藤 彬  
 ⑥ 9 祈ぎ事の五風十雨や稲の花 藤沢潮子  
 ⑥ 9 きちさちが飛びつき晴れてゆく気鬱 渡辺真帆  
 ⑥ 9 自転車の立漕ぎが出来二学期へ 成海 静  
 ⑥ 9 どの風にも靡く薄の底力 小熊千恵子  
 ⑥ 9 路地奥は昭和の色に秋夕焼 藤沢潮子  
 ⑧ 8 吹き抜ける空気のまろし葡萄棚 佐藤 彬  
 ⑧ 8 十月が来る海の色つくりつつ 成保房子  
 ⑧ 8 一徹の父の拳固や胡桃落つ 今井愛子  
 ⑭ 7 着たがりてすぐ脱ぎたがる浴衣の子 長部多香子  
 ⑭ 7 河口出る帰燕の上にまた帰燕 安澤静尾  
 ⑭ 7 長引きし自粛や蓮の花は実に 星野祐子

6 長き夜の脇に置きたるルーベかな 古川よし秋  
 6 よく齢を聞かれる今日の頬被 大久保窓子  
 6 露けしや山の向かうに山があり 保坂季泉  
 6 今朝の秋音立て流す厨水 藤沢潮子  
 6 磨崖仏大き口より秋の声 中村梨枝  
 6 海光をゆりかごにして子蠅螂 司 雪絵  
 6 小望月我が家ゆつくり通過せよ 猪又秀子  
 6 鈴虫の声ごと飼はれ古ぶ甕 水野宗子  
 6 島影は志功の女体鳥渡る 袖山リエ  
 6 泣く児抱き帰る背中に踊笠 武本松久  
 6 束の間を蕊奔放に曼珠沙華 榎木幸子  
 6 刃と呼吸あはせて栗の皮を剥く 吉川さが子  
 6 門前通り皆一斉に水を打つ 藤田隆雄  
 6 秋の夜は父の癖ある万年筆 成保房子  
 6 秋気澄む双眼鏡を首に下げ 水野宗子  
 6 雲行くや廃線路いま穂草道 井澤秀峰  
 6 外灯は裸電球蚯蚓鳴く 佐藤 彬  
 6 遠雷やなげしに飾る鬼の面 長部多香子  
 6 新米や価格闘争した記憶 今井愛子  
 6 残る蚊とあなどるなかれ吸ふ力 小川久子  
 6 木犀の香や播粉木は身をけずり 石黒英進  
 6 保護眼鏡外せぬ介護残暑なほ 小熊千恵子  
 6 節々が痛む秋海棠もまた 小林悦子  
 6 かまつかや思ひ出ときに立ちはだかる 山田一風

4 風は葉に転がりたる芋の露 大久保窓子  
 4 末の子に不屈の兆しみんみん鳴く 渡辺真帆  
 4 継ぎはぎの縄文土器や暮の秋 小林悦子  
 4 クレパスの七色十色里の秋 菅原あや子  
 4 彩褪せる花に溶け合ふ秋の蝶 古川よし秋  
 4 青ふくべ七句成るまで髭剃らず 山田一風  
 3 猛暑五輪少女誇るう金メダル 大島めぐみ  
 3 コロナ禍で使はぬ二間障子貼る 猪又秀子  
 3 縄文の丘に似合ひの鱒雲 成保房子  
 3 蓑虫の啼くこともなく会議終ゆ 早津翠邦  
 3 秋高し蔓のあるもの蔓伸ばす 山田一風  
 3 遊び心もて余しるる狗尾草 吉川さが子  
 3 物干し場に鯨尺ある敬老日 早津翠邦  
 3 遊郭に朱の格子窓萩の雨 山口冬人  
 2 亡妻が夢で嘆くよ古酒の酔ひ 武本松久  
 2 暫らくは芋の露抱く古刹径 菅原あや子  
 2 音止みて担ぐ他なき草刈機 米山節子  
 2 屋月や戌辰の役の慰霊祭 司 雪絵  
 2 霧深し混迷の世をさまよえる 伊藤亨子  
 2 秋風や友人知人の訃に接す 倉又紫水  
 2 水引や目の前のこと一つづつ 榎木幸子  
 2 秋の蚊の音なき影や光堂 袖山リエ  
 2 稲光バイエルを弾く少女かな 古川よし秋  
 2 鱒手で割くも海辺に住みつきて 菅原あや子

2 くちなわの今日全身を見せつける 藤田隆雄  
 2 縄文の森へ森へと花芒 保坂季泉  
 2 吉報あり門の凌霄盛りかへす 渡辺真帆  
 2 今年からビルに盗られし遠火花 藤田隆雄  
 2 天と地をこよなく染めし晩夏の陽 大島めぐみ  
 2 雁渡し考の写真の出してあり 保坂季泉  
 1 あの顔もこの顔も居て秋句会 小熊千恵子  
 1 秋暑しスマホで癒す待ち時間 星野祐子  
 1 ふるさとの山河を抜手秋日和 早津翠邦  
 1 待たれたる嬰の誕生萩の寺 黒坂愛子  
 1 「順三郎」の碑に心置き登高す 袖山リエ  
 1 不慮の報心も乱る初嵐 石黒英進  
 1 秋の昼子のキョロキョロと参観日 安澤静尾  
 1 菌狩八十路の我の先立ちぬ 武本松久  
 1 広き採掘場に立ちふと秋思 黒坂愛子  
 1 雁の声きつとコロナ禍など知らず 石塚吉江  
 1 大根の双葉ハートのかたちして 成海 静  
 1 台風之余波か坂口安吾の碑 山口冬人  
 1 赤とんぼ真向へば顎そらしけり 長部多香子  
 1 過去辿り一粒づつの葡萄食ぶ 中村梨枝  
 1 黒姫山の採掘後や独活の花 黒坂愛子  
 1 人の死や金木犀の花盛り 大久保窓子  
 1 秋彼岸何があるうと出迎えぬ 伊藤亨子  
 1 温泉はいつもつるつる秋の雲 小林悦子

第十三回句会

1 秋天や佐渡見平のコーヒー屋 司 雪絵  
 1 相対性理論ことさら明かき秋灯し 成海 静  
 1 唐辛子束ね干さるる物干し台 猪又秀子  
 1 鷲の輪も乱る過疎荒れ初嵐 石黒英進  
 1 内面は継ぎ接ぎ数多鱗雲 石塚吉江  
 1 身に入むや俳友二人西方に 小川久子  
 1 目のほかは見せぬ秋社の巫女溜り 井澤秀峰  
 1 牛蛙・鴉・水辺のトッカータ 刈田光児  
 1 ひぐらしの自粛自粛と高鳴けり 中村梨枝  
 1 秋球根を植うる妻の生き甲斐か 小川久子  
 1 ページ繰る秋日さし込む文机で 吉川さが子  
 1 蚊遣香夜にまた観るVTR 刈田光児  
 1 本腰は南瓜ひとつに入るもの 米山節子  
 1 恰幅良き蟋蟀鳴ける土間の隅 榎木幸子  
 1 咲き揃い娘を迎え入る彼岸花 伊藤亨子  
 1 花野へと連れきし母は幾むかし 井澤秀峰  
 1 紫花咲き蝶の群らがる空となる 倉又紫水  
 1 採る舟の見えず菱の実池を占め 星野祐子  
 1 ひよいとちろる嬰のご機嫌うかがひに 米山節子  
 1 法師蝉鳴きて静もる昭魂碑 安澤静尾  
 1 若くして逝きし君惜し早星 刈田光児  
 1 敬老日孫の電話で卒寿知る 倉又紫水  
 1 酸橋をしぼり塩気無き患者食 水野宗子

順位得点 作品 作者  
 ① 22 雪霏々と白は重たき色になる 袖山リエ  
 ② 16 不用意にもらす言葉の寒さかな 長部多香子  
 ② 16 寒造り蔵に麴の呼吸音 袖山リエ  
 ② 13 無位無冠なれど似合ひの冬帽子 成保房子  
 ⑤ 11 鉛筆を削りし木の香明日は雪 藤沢潮子  
 ⑥ 9 一喝は怒涛へ寒の明け鴉 菅原あや子  
 ⑦ 9 風音にムンクの叫び冬来たる 風間靖彦  
 ⑦ 9 地吹雪やうしろすがたの山頭火 山口冬人  
 ⑦ 9 大マスク外し本音になりけり 長部多香子  
 ⑦ 9 窓に雪自由が孤独連れて来る 小熊千恵子  
 ⑩ 8 海の漢怒涛を恵方と胸を張る 菅原あや子  
 ⑩ 8 冬夕焼使ひきつたるサッカー部 成保房子  
 ⑩ 8 揚げ舟の底に堅砂寒の入 水野宗子  
 ⑩ 8 着ぶくれて追伸ばかり増える文 小熊千恵子  
 ⑩ 8 冬はじめ老がずしりと重くなる 風間靖彦  
 ⑩ 8 凧あげの宇宙の果へ紐伸ばす 藤沢潮子  
 ⑩ 8 初詣淑女の影につまづきぬ 井澤秀峰  
 ⑩ 7 目に見えぬものを恐れて着ぶくれて 山田一風  
 ⑩ 7 床柱背に歳鮭の一の鱭 浅野朝女  
 ⑩ 7 巢穴出るやうな起床や寒の内 榎木幸子  
 ⑩ 6 ひと日だけの十人家族お元日 清水美智子

6 樟脳の香も着て装う初鏡 石黒英進  
 6 冬障子一分の隙も見せぬなり 藤田隆雄  
 6 丸まるは防御のひとつ寒卵 榎木幸子  
 6 雪下す男いつしか鳥になり 刈田光児  
 6 そこそこの長寿を願ふ初詣で 中村 侖  
 6 交替で守る火鉢や村社 水野宗子  
 5 鮭吊るる腹に一物も無きものを 浅野朝女  
 5 数へ日のたこ焼を買ふ列にをり 小林悦子  
 5 太陽はかくれ上手よ裏日本 米岡幸子  
 5 切妻のふぶく屋並や良寛忌 清水道径  
 5 餅だけを焼いて男の朝餉かな 中村 侖  
 5 過疎となり種の尽きたる雪喧嘩 山口冬人  
 5 米寿来るところに灯す実万両 長部多香子  
 5 窓細く冬満月を見てゐたり 早津翠邦  
 5 春を待つ部屋着外着を掛けならべ 山田一風  
 4 父と子の土偶のマイム初笑 渡辺真帆  
 4 冬枯や雀に梢ありあまる 早津翠邦  
 4 咳ひとつ己を隠したきときも 山田一風  
 4 生れくる詩を待ちてをり雪の夜 成海 静  
 4 コロナ禍に誰も来ぬ日の木菟鳴けり 石塚吉江  
 4 拍手のその手にもらふ蜜柑かな 古川よし秋  
 4 片足立ち漸くできて春を待つ 小川久子  
 4 助走して的一樹へ雪つぶて 藤沢潮子  
 4 髪結ぶことは忘れぬ程の風邪 小熊千恵子

4 健康を氣遣ふ文字の寒見舞 星野祐子  
 4 挨拶のやうに明るさ言ふ二月 榎木幸子  
 4 着ぶくれて句を詠まぬ日の脳かろし 井澤秀峰  
 4 焦げのある油揚げ雪を来しおまけ 米山節子  
 4 梢よりはらはら零れ寒雀 中村梨枝  
 4 待春のふはふはのパン抱いてくる 司 雪絵  
 3 朝食に朝刊添えて去年今年 星野祐子  
 3 山門の獅子の風化や寒椿 中村梨枝  
 3 父は子へ子は父へ打つ雪礫 吉川さが子  
 3 凍道行く肩に力の入りしまま 保坂季泉  
 3 止どめ得ぬ地球のひずみ凍てし空 米岡幸子  
 3 なまはげの翌日は鱈漁に出る 安澤静尾  
 3 寒月やひとり寝ねたるだけの部屋 司 雪絵  
 3 去年今年猫は静かに寝て暮す 中村梨枝  
 3 楚楚と立つ信号待ちの冬木の芽 猪又秀子  
 3 夕されば母の気配や冬障子 田村美和子  
 3 やるべきをわずか残して日の短か 風間靖彦  
 3 一服のブラックコーヒー春兆す 猪又秀子  
 3 相聞歌此岸彼岸へ冬の虹 刈田光児  
 3 人日や老いの早まる膝頭 吉川さが子  
 3 冬波にほんの一步が間にあはず 黒坂愛子  
 2 摺り足に進む神宮寒に入る 古川よし秋  
 2 初風呂を介護の世話となりてをり 安澤静尾  
 2 襟正す新年こそその床の軸 石黒英進

2 街眠る空家きしきし水柱伸ぶ 袖山リエ  
 2 餌を撒きて待つや親しき冬の鳥 司 雪絵  
 2 自肅下の具を密にするのつべ汁 米山節子  
 2 見慣れたる稜線消える街の雪 黒坂愛子  
 2 元旦の息止めてひくルージュかな 松野半畝  
 2 黄落や贈る句集にルビを振り 渡辺真帆  
 2 珈琲の香り窓辺に冬月夜 菅原あや子  
 2 七草はフリーズドライ風の音 吉川さが子  
 2 寒鼻論すことばが見当たらず 石塚吉江  
 2 初東風も飲まんと羅漢赤き口 石黒英進  
 2 雪後の天輝く峰と魁夷展 清水美智子  
 2 雪形に隣家の媪動き出す 小川久子  
 2 雪転び知命の手足炉にかざす 米岡幸子  
 1 冷し中華のメニュー外さず年を越す 藤田隆雄  
 1 峠越えおどろおどろや雪の華 石塚吉江  
 1 寒卵喪中の友を見舞ひけり 小川久子  
 1 寒夕焼キッチンの水遊る 猪又秀子  
 1 雨・霰・霰・順接の雪が降る 刈田光児  
 1 塩蛙の瞳はふるさとの河を恋ふ 浅野朝女  
 1 暖房とメロディー流れ開演前 星野祐子  
 1 野外ステージ大方埋もれ山眠る 小林悦子  
 1 風花や婆少年に恋をして 黒坂愛子  
 1 寒星や踏みて会ひたき人の殖ゆ 清水美智子

1 玄冬のシベリア香月泰男展 清水道径  
 1 代々の位牌拭きたる大晦日 太田チエ子  
 1 入室の前の検温初句会 水野宗子  
 1 フロントガラス見えつ隠れつ初浅間 佐藤 彬  
 1 秋の雲ほころびつころう布団かな 栗城豊重  
 1 春眠のなかほどまでの恋路かな 大島めぐみ  
 1 バイヤーの声を張りあげ鮫の競り 古川よし秋  
 1 冬麗くるりんバスの小旅かな 渡辺真帆  
 1 冬晴や小さな大に吠えられて 松野半畝  
 1 軽々と我が足掬ふ雪しまき 保坂季泉  
 1 春隣そつと口笛吹いてみる 山口冬人  
 1 秋茄子や初収穫に胸おどり 栗城豊重  
 1 山茶花や駅から船に声を掛け 松野半畝  
 1 自肅中なれど寅年初句会 大島めぐみ  
 1 乗用車よべに降りたる雪を積む 太田チエ子  
 1 打ち揃ひ鎮守の杜の初神籤 佐藤 彬  
 1 冬天や超音速の貢ぎ物 田村美和子  
 1 寒月や速くて近い神の國 大島めぐみ  
 1 爽籟を受けて新たな旅立ちへ 栗城豊重  
 1 冬の虫その懸命さ子に似たる 成保房子  
 1 冬帽子日当る山の十揃ふ 早津翠邦  
 1 元日や少女の足袋の片汚れ 井澤秀峰  
 1 大寒のまた確かめる外の景 保坂季泉  
 1 雪の降る速さ歯ブラシ当つ速さ 米山節子

襟巻を法話のあとで忘れおり 藤田隆雄  
 幼子の寝顔いとしやお年玉 安澤静尾  
 誰もぬぬ二階みしみし氷柱して 小林悦子  
 内股の夫の足跡雪しまき 田村美和子  
 寒菊の開花を待てる茶の間かな 太田チエ子  
 冬深し搦手なるかオミクロン 佐藤 彬  
 雪の公園黒き犬待つ白き犬 清水道徑

紙面の都合上、特選、佳作の選者名は省略  
 いたしました。ご了承下さい。

■句会とは違った楽しみがあります  
 通信句会にご参加ください……！  
 通信句会については事務局長の尽力で、本誌に報告  
 のある通り、これまで15回開催され、参加者も多くな  
 っています。通信句会は事務局には大きな負担のある  
 ところですが、参加者にとりましてはじっくりと選句  
 ができ、勉強になるとの声もあるところでは  
 開催の通知がありましたら、ぜひ多数の会員さま  
 のご参加をお願いします。

# 旬会報

## いちいち吟行会句会報 梅雨兆す長岡・雪国植物園

令和四年六月六日(月) 開催

梅雨の走りの雨模様の中、妙高、糸魚川からの  
 参加者も含めて、十九名が長岡駅に集合。ここか  
 らはジャンボタクシー二台に分乗、山法師の白い花の並木  
 を一路郊外の雪国植物園へ。目的地についても堅栗花雨は  
 止む気配がない。でもそこは俳人、雨の日は雨の句をと園  
 の傘を借りたりして、その園の決まりにある「歩いて良い  
 のは、道の上だけ」という山道をそれぞれの俳句の風景を  
 求めて山中へ。十一時半過ぎ迎えのタクシーで駅前のまち



▲雨を避けて植物園の四阿での参加者一同

なかキャンパス長岡へ移動。  
 二句投句して昼食、午後一時  
 から句会、七句選の真帆副会  
 長の進行で合評、最後は道徑  
 会長の総評で締めくくり、雨  
 ではあったが実り多い「いち  
 いち吟行会」を終えた。  
 細やかな心配りで会を運営  
 していただいた長岡の会員の  
 皆さんに感謝の拍手を贈りま  
 す。

### ■いちいち吟行会句会作品

#### 高点句

- |                 |      |       |    |
|-----------------|------|-------|----|
| 万の葉に万の雨音青楓      | 長岡市  | 袖山    | リエ |
| 句ふやに緑雨を抜けて来し総身  | 長岡市  | 米山    | 節子 |
| 山法師仰ぐ齡の見えてをり    | 長岡市  | 吉川さ   | が子 |
| 双体の久那斗の神や梅雨寒し   | 糸魚川市 | 八木    | 進  |
| 雨音は喜びの唄齒朶若葉     | 阿賀野市 | 征木    | 幸子 |
| 細やかな雨音ひろふ夏薊     | 三条市  | 清水    | 道徑 |
| 一人一句抄出          |      |       |    |
| さは言へどひとり淋し山法師   | 三条市  | 司     | 雪絵 |
| 傘を打つ雨音を縫ひ夏うぐひす  | 三条市  | 小林    | 悦子 |
| 幹ねじれ白き雫の山法師     | 長岡市  | 小川    | 久子 |
| 覗き込む我に浮きくる蝌蚪の群  | 阿賀町  | 山口    | 冬人 |
| 青葉目に農家休みの雨となり   | 糸魚川市 | 猪又    | 秀子 |
| 肩に手を添へたる神や山法師   | 妙高市  | 井澤    | 秀峰 |
| 山法師鬨に染まらぬ白さかな   | 長岡市  | 中村    | 命  |
| ポランティアハウスの主は扇風機 | 新潟市  | 佐藤    | 彬  |
| 植物園へ虫見に来ること約す   | 長岡市  | 成保    | 房子 |
| 田を渡る風麦秋の風と会ふ    | 長岡市  | 小熊千恵子 |    |
| 山ぼふしは見上ぐる花よ雨やさし | 三条市  | 清水美智子 |    |
| 逝く母に頬紅うすく夏あざみ   | 長岡市  | 今井    | 愛子 |
| 山猫の丸太彫撫で梅雨兆す    | 長岡市  | 渡辺    | 真帆 |
|                 | (渡辺  | 真帆    | 報) |

## 事務局短信

### ◇令和4年度定例総会（既報）

コロナ感染症対策のため2年間は紙上開催となり3年ぶりの開催。3月21日三条市東公民館に26名が出席して開催。井澤副会長を議長に議事に入る。

①令和3年度行事、決算、監査、会員異動をそれぞれ報告

②令和4年度行事計画については

・3月21日(月) 定例総会及び「第30回にいがた俳句フェスティバル」

・6月 関東甲信越静ブロック連絡会議 未定

・8月「現代俳句にいがた」第14号 発刊

・9月 定例役員会

・いちにち吟行会

春・長岡 秋・三条

・通信句会の実施

年5〜6回実施の予定

・事務局だよりの発行(5月、12月)

【役員の新任・退任について】

現役員は来年の総会時まで

幹事退任 藤沢潮子

## 編集後記

▼突然、編集委員を命じられました早津翠邦です。よろしくお願い申し上げます。最近、対岸の能登半島が蒼く、濃く見えだしたように、いや、少し太って見えます。頻繁に蠢く地震の所為か、まるで動詞の音便のように変化が見え隠れしています。フォッサマグナ(日本の地質構造線)の西端に位置する糸魚川市は、能登の鼓動と明け暮れし、ときには夕焼けの帯で繋がっています。(早津翠邦)

▼歴史ある祇園祭が毎年京都で執り行われていますが、この行事が当地にも伝わったと言われ、糸魚川の八坂神社御旅所でも夏祭りに併せて祇園祭が行われます。このとき、短歌と合わせて俳句が奉納されます。

▼作品を広く一般募集し、齊藤美規先生、のちに相沢透石先生の選をいただき、所定の灯籠に掲示していただきましたが、今は「いっけ句会」が奉納しています。どこの結社も会員の高齢化が進

◇この2年間は、コロナ感染症対策で総会、4役会、役員会、句会などほとんど中止となってしまった。

令和2年3月実施予定の第29回にいがた俳句フェスティバルは、大会を直前に中止せざるを得なくなり、講師の石寒太先生には大変なご迷惑をお掛けしてしまいました。

令和3年3月のにいがた俳句フェスティバルは当初から実施できる状況はなく、準備段階で中止と決定。

令和4年3月実施予定の第30回にいがた俳句フェスティバルについては、前年10月に定例役員会を開催して実施を決定。以降実行委員が3回集まってフェスティバル開催にこぎつけることができた。

石寒太先生には3年越しの講演とナリご迷惑をお掛けしましたが、責任を果たすことができホッとしている。

この開催を契機に、定例総会、春の吟行を実施することができ、ようやく通常の態勢に戻ることができた。まだまだコロナウイルスの波状攻撃が繰り返される状況にあるが、感染対策に配

む中で、新会員募集に力を入れているところですが、こんなこともその一助になればと思います。(山田一風)

▼梅雨明けと同時に鳴き始める蝉。ところが今年は一向に蝉の便りを聞かない。テレビニュースによると梅雨の期間が最短だったため、羽化が間に合わぬとのこと。それでもと思い立ち、七月十六日午後四時過ぎ、姫春蝉が聞きたく取るものも取りあえず出掛けた。到着を待っていたように、一斉に鳴き始めた姫春蝉、あまり嬉しくて山に向かい両手を合わせていた。本当に至福の一時だった。(猪又秀子)

▼近ごろ郵便局が遠くなっている。料金受取人払いの赤い振込用紙でも、料金が必要だとのこと。すったもんだの末、それならコンビニで振り込みなさいと局員から言われたので、そうしたのが何だか腑に落ちない。郵便の届くのも遅くなった。本誌の原稿のやり取りも郵便なので、その影響を顕著に受けて困った。(八木進)

慮しつつ社会活動を続けていくことが肝要と考えている。

◇コロナ感染症発生の直前の令和元年8月に第1回を実施した通信句会は、この7月には第16回を数え、諸行事が中止になる中、会員同士の親睦・研鑽を深めることができた。毎回会員の6割の方から参加していただいている。

現代俳句は、定型から自由律、無季まである。「俳句自由」の精神でご参加頂きたい。内々の句会ですからお気軽にご参加を。

◇6月実施予定の関東甲信越静ブロック連絡会議は中止

◇秋の「いちにち吟行会」へのお誘い  
10月12日水の予定  
(別紙でご案内)

現俳会員同士の年2回の研究会です。是非ご参加をお願いします。

◇会費千円未納の方は、山口冬人会計に納入してください。

◇新入会員をご紹介ください  
適任者を事務局までお知らせください。

## 編集委員

八木 進

猪又 秀子

早津 翠邦

山田 一風

現代俳句にいがた第14号

発行日 令和4年8月1日

発行所 新潟県現代俳句協会

発行者 清水 遣 径

編集代表 八木 進

協会事務局 佐藤 彬

〒九五〇―二二二

新潟県新潟市西区内野町六二六  
☎〇二五―二六二―二七六一

印刷所 脩内山印刷